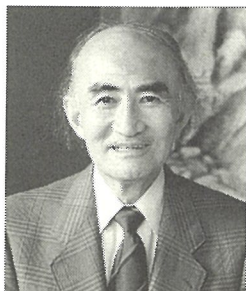


故 末光力作名誉教授を偲んで



野 本 真 也

(大学神学部教授)

●末光力作氏略歴●

1924年 7月28日 生まれ
1947年 9月 北海道帝国大学農学部
1959年 4月 同志社大学工学部専任講師
1963年 4月 同志社大学工学部教授
1993年 3月 定年退職
1993年 4月 同志社大学名誉教授の称号を受く
1995年 6月11日 10時40分 永眠 70歳

六月一日の日曜日、末光力作先生はご自宅に隣接する日本基督教団賀茂教会の礼拝の讃美歌の聞こえるさなか、安らかな眠りのうちに天上に召された。

一九二四年七月二八日、末光信三（元同志社女子中高校長・信子（元マクリン幼稚園園長）ご夫妻の長男として誕生された先生は、府立京都第一中学校から北海道帝国大学へ進学、一九四七年九月同大学農学部水産学科化学科を卒業された。その後、同大学農学部助手、国際キリスト教大学研究所員を経て、一九四九年七月から北海道酪農学園短期大学で教鞭をとられていたが、一九五八年四月から京都大学農学部農芸化学科で研究に専念され、一九六一年六月京都大学から農学博士の学位を受領された。

一九五九年四月、同志社大学工学部工業化学科へ専任講師として迎えられ、一九九三年三月定年でご退職になるまでの三十四年間、同志社大学工学部において有機化学、農芸化学、微生物化学、天然物化学など広範囲にわたる研究と教育に専念された。その間、一九六六年から一年間、カナダのアルバータ大学で在外研究をされた。

ご専門の研究と教育のかたわら、新島襄の科学者としての側面を詳しく探求し、貴

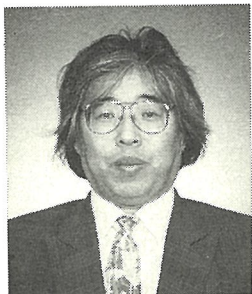
重な業績を残された。またラグビー部後援会の重要なメンバーとして貴重な働きを担ってこられ、数年前には「同志社大学ラグビー部の歩み」と題する小冊子をまとめられた。

先生は誠心誠意、信仰に生きた方であつた。チャペルアワーや教会の礼拝では大きな声で讃美歌を歌い、心からの祈りを捧げ、聖書の読みの深い奨励をしてくださった。

昨年のクリスマススの頃、背中に痛みを覚えられ、二月九日肝臓の手術を受けられたが、ご自分の病状について客観的な説明を求め、科学者らしい態度を貫かれた。三月二四日に退院されてからは、東洋医学を中心とした免疫活性化の療法に取り組み、一時は鴨川べりを散歩できるほどまでに快復されたが、最後の数か月、先生はご家族とともに、じつに濃縮された時をお過ごしになられた。それはご家族との暖かいぎずなを味わうために神から与えられた恵みの時であつたと思う。

なお田辺校地に新築された工学部棟や新食堂のために、先生は聖書に因んだ名前を付けてくださったが、そのこともそれらの建物をみるたびに懐かしく想い起こされる。

故 岡本昌幸教授を偲んで



八 田 英 二

(大学経済学部教授)

●岡本昌幸氏略歴●

1941年 6月10日生まれ
 1967年 3月 同志社大学大学院経済学研究科修士課程修了
 1970年 4月 同志社大学経済学部助手
 1982年 4月 同志社大学経済学部教授
 1995年 6月15日 23時30分 永眠 54歳

六月一八日の日曜日、降りしきる雨のなか経済学部教授岡本昌幸先生は、ご家族の方々、大学関係者、それに大勢の教え子に見送られ、天国へ旅立たれました。あまりにも突然のご逝去に、わたしたち一同、口にする言葉もなく、手を合わせ、ただ先生のご冥福をお祈りするばかりでした。その八日前、六月一〇日には、先生は五四回目の誕生日をお迎えになったところです。働き盛りの五〇代、ご家族も、大学も、そして学界も、まだまだ先生のお力を必要としておりました。

先生は、この五月一三日に鬼籍に入られた英文学の権威、同志社女子大学名誉教授故岡本昌夫先生、いつ様の三男として一九四一年にお生まれになりました。名門、紫野高等学校から同志社大学経済学部に入學され、先生は経済学徒としての第一歩を踏みだされました。経済学部では俊英の集う黒松巖ゼミナールで学ばれ、そこで初めて終生のご研究テーマであった産業組織論の書物を手にされました。大学院生として学究生活に入られてからは計量経済学の手法を応用され、寡占市場の実態に鋭いメスをふるわれて、数多くの実証論文を発表されました。寡占企業による管理価格の設定や

その弊害についての先生の業績は学界で極めて高い評価を受けております。

経済学部教授 故 西村晃先生の追悼論文集に発表されました「産業内生生産性分散に関する一考察」が先生の手による最後の著作となりました。四月からは国内研究員として、ゼミナール以外は講義から開放され、腰を落ちつけて研究に取り組まれておりました。教育にしろ研究にしろ、先生ほど着実かつ慎重な方を知りません。論文の発表でも講義でも、先生はつねに完璧を期してこられました。少しでも問題が残っていたれば徹底的に調べあげられました。そして、納得されるまでは、決して口にはされたり文章にされることはありませんでした。自分が分からないことを人に教えるわけにはいかないという先生の堅い信念によることはいくまでもありません。

先生の研究室は光塩館五階にございます。エレベーターを下りてすぐ左手、先生の研究室の扉に付けられた行先表示は、あの日以来、「帰宅」を指しています。数か月を過ぎたいまでも、研究室の前を通るたび、もしや「在室」の表示に替わっているのではなかったことも二度や三度ではありません。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

畏友故 正木久司教授を偲んで



島 弘

(大学商学部教授)

● 正木久司氏略歴 ●

1934年 3月 7日生まれ
1961年 3月 同志社大学大学院商学研究科修士課程修了
1967年 4月 同志社大学商学部助手
1975年 4月 同志社大学商学部教授
その後人文科学研究所長、1994年 4月から商学部長
1995年 6月17日 23時38分 永眠 61歳

去る六月一日に、正木久司教授は、急逝されました。正木教授は一九五九年に同志社大学商学部を卒業され、同志社大学大学院商学研究科に入学、修士課程・博士課程を岡村正人教授の指導の下に財務管理論、特に株式会社論を中心に研究を重ねられた。同大学院単位取得後は、大阪証券研究所に勤務されていたのですが、一九六七年に母校の同志社大学商学部助手に採用され、その後専任講師、助教授を経て、一九七五年に教授となり、現在に及んでいます。また一九七九年には、同志社大学在外研究員として、世界の経営学のメッカであるハーバード大学のビジネス・スクールに留学され、教授の長年の研究である「資本と経営の分離論」のバイオニアであるバリー研究の資料を収集して帰国されました。また、一九八三年には、長年の株式会社の研究成果をもって、立教大学に申請されていた経済学博士の学位が授与されました。教授はまた大学院教授として、多くの研究者を育て上げられました。

教授は同志社大学での研究は、株式会社論の処女作であり、学位論文でもある『日本の株式会社金融』（ミネルヴァ書房、一九七三年）、その他、株式会社に関する六冊の

書物を世に問われたのを始め、共著や翻訳書の多くをもつて、自らの見解を発表されており。また大変な健筆家で論文の数は数え切れない位を発表されています。その研究成果をみても分かりますように、教授は大変な勤勉実直型の勉強家で、その面では学生に少々敬遠されがちな側面もありました。思い出すのは教授が、私が主催しておりました研究会にも大学院生として出席されており、その時の若き時代の情熱あふれる研究者の姿であります。教授は恩師岡村正人教授の生涯の研究テーマであった「株式会社の研究」を引き継がれ、そのさらなる発展を一貫して試みられたのであります。この研究者としての学問的情熱が、多くの研究業績を生み出し、また、多くの研究者を引きつけたのであらうと思われま

す。株式会社の研究は経営学の研究の基礎的な部分でありますので、教授の研究はおそらく教授の理論的後継者によってさらに発展させられるであらうと言うことは確信することが出来ます。正木教授の研究は残念ながら途中で挫折されざるを得なかったものでありますが、天国でその発展を暖かく見守って下さい。教授のご冥福をお祈りいたします。